
地獄学園デスクール！！

吉川浪漫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄学園デスクール！！

【Nコード】

N8470Z

【作者名】

吉川浪漫

【あらすじ】

主人公、秋茜鐘明。

ある日目を覚ましたそこは死後の学校、

地獄学園デスクール。

青少年少女たちが終わらない戦いを続けるそこで、

秋茜鐘明は何を見るのか。

第一話「ようこそ地獄学園」

ぼんやりとした意識の中、遠く響く爆発音が聞こえた。ここは一体何処なのだろう。長い間、眠っていた様な気がする。全身に伝わる感触からするに、俺はどこかにうつ伏せに倒れている様だ。それと睨が重い。手を伸ばしてみる。地面は堅く、ざらざらとしていた。例えるなら、道路の様な手触り。俺は目を開いた。まず目に入ったのは赤く燃える夕日。どうやら時刻は夕方の様だ。それからゆっくりと俺は立ちあがった。そのまま周囲を見渡してみる。どうやら俺が倒れていたのは道路の上の様だった。何が例えるなら道路の様な手触りだ、道路の上じゃないか。

俺は再び周囲を見渡した。少しだけ、まだ頭がぼんやりしている。俺が倒れていたのはどこかの大通りの道路の様で、何車線もある広い道路沿いにいくつもの建物が並んでいた。中には見慣れた看板もいくつかあった。

そこで俺はある事に気付く。俺が倒れていたのは大通りの道路。当然自動車は何台も走っていてしかるべきの筈だろう。そもそもそんな大通りの道路で倒れているなんて危ない事この上ない。しかし周囲を見渡してみても車は一台も走っていないかった。駐車してある車もない。いや、それどころか誰も人がいない。本当に誰もいない。見覚えのある筈の看板のハンバーガー屋にも、その隣の全国展開のレンタルビデオ店にも・・・誰も、いなかった。そして当然誰の声も聞こえず、誰かの足音すら聞こえない。

急に俺は薄ら寒さを感じた。背筋に走る冷たい物が俺の意識を目覚めさせ始める。ここはまるでゴーストタウンだ。本当に、ここは何処だ。町並みから推測するに多分、いや絶対に日本だ。それも結構な都会。しかも時刻は夕方。こんな大通りを誰も歩いていない訳がない。常識的に考えて、おかしい。

そして寝起きの様な意識が完全に覚醒したのを俺は感じる。そも

そも何故俺はこんな道路の上で寝ていたんだ。当然、分からない。もうこれで何度目の疑問かも分からないが、此処は何処だ。当然、分からない。一番最初、ぼんやりとした意識の中で遠く聞こえた爆発音は一体……。ん？爆発音……。何が爆発したかは分からないが、何かが爆発したという事は誰かいるという事だろうか。

爆発音の聞こえた方向に行けば誰かに会えるかもしれないと思いあのかの音を思い出そうとするが、少し無理そうだった。何しろあれが聞こえた時はとても意識がぼんやりとしていた。それにもかしたらあの爆発音は実際に聞こえたものではなく、夢か何かだったのかもしれない。

俺はズボンのポケットに手を入れてみた。そこにあれがあれば、どうにかなるかもしれないと思ったからだ。そしてポケットの中に俺は四角い長方形の存在を感じる。あった。

俺がズボンのポケットの中から取り出したのは携帯電話だった。他にもポケットには財布が入っていたが今は財布は役に立たないだろう。携帯電話は使い始めて一年目くらいの、真っ黒で、所々に白のアクセントが入ったお洒落な奴だ。握ると、右の端がすこしざらりとしているのが分かる。数ヶ月前に道路に落とした事が原因の傷だ。これは間違いなく俺の携帯電話だ。俺は携帯電話を開く。そして時間を確認しようと思わず携帯電話を落としそうになった。

【AX：ケヴ】

携帯電話の時刻表示。そこが正常に表示されていなかった。本来数字が表示される筈のそこには、文字化けをしてしまったかの様に半角の片仮名とアルファベットが表示されていた。俺の携帯電話は壊れてしまったのだろうか。良く見ると、画面右上に表示された日付の欄も同じ様になっている。そして更に画面の端に、俺は圏外の文字を見つめる。圏外。電波域圏外。有り得ない。あり得る筈がない。こんな都会が圏外だなんてある筈がない。そう、だからそう。

間違いない。俺の携帯電話は壊れている。壊れてしまったんだ。

そういえば俺は此处で目を覚ます前は何をしていたのだろう。思い出そうとした瞬間、俺の脳裏に何かが裂ける様な痛みが走った。思わず俺はうめき声を上げ、蹲りそうになる。痛い。頭が痛い。思い出せない。何も。そして何も、分らない。

頭の中で巨大な竜巻が逆巻いている様だった。訳の分からない言葉が駆け巡り、脳髓を焼き尽くす。俺は混乱しているの、それともまだ目覚めていないだけなのか。もしかしたら、怯えているのか？怯えているとしたら・・・何に？

その瞬間だった。遠く、爆発音が響き渡る。あまり大きくはないが、確実に聞こえる。俺はふらふらと歩きだした。爆発音が聞こえた方向に向かって。

途中、様々な建物の前を通り過ぎた。マンションにアパート、コンビニエンスストアにスーパーマーケット。ファミリーレストランに洒落たフランス料理店・・・。

しかしその何処にも誰もいない。まるで俺だけが世界に一人取り残されてしまったかの様だった。もしかしたら此处は、死後の世界か何かなのかもしれない。となると俺は死んでしまったのだろうか。まさか。そんな筈がある訳ない。だけどここで目を覚ます前の事は何も思い出せない。やっぱり、俺は死んだのかもしれない・・・。

どちらにせよ、今は爆発音の聞こえた方向に向かうしかなかった。何が起きて、何が爆発しているのかは分からないがきつと誰かがいると思ったからだ。誰かに会えればきつと、きつと何かが分かる筈だ。

「やあ君、こんな所でどうしたんだい？」

俺が突然背後から話し掛け足られたのは、爆発が聞こえた方に向かつて歩き出してしばらく経った後、少し広めの路地の曲がり角を曲がろうとていた時の事だった。聞こえた声に振り返るとそこには一人の少女が立っていた。年齢は俺とそう変わらないだろう。多分十六から十八、その辺りに見えた。長い綺麗な黒髪をしていた。だ

けれど肌は異様なまでに白く、綺麗だった。そして何故かどこかの学校の制服を着ていた。黒を基調としたデザインの、やや奇抜な制服だった。

「ここが何処だか、分かるか」

気がつけば俺は質問をしていた。やっと誰かに会えて少し焦っていた。だがしかし、人間に出会えた事で俺はいくらか安心もしていた。

「ここが何処だか君は知らないのかい？」

黒髪の少女が逆に問い返してくる。

「分からない。さっきここで目が覚めた」

俺がそう言くと、少女は何故か微笑を浮かべた。

「そうか、君は新入生か。なら知らないのも無理はないね」

「新入生？」

「ここに来たばかりの新人って事さ」

不思議な例えをする、と俺は思った。

「来たばかりって事は、俺以外にもここに来た奴がいるのか」

「うん。そうだよ。僕を含めてね」

少女はそう答えるとくるりと後ろを向き歩き出した。そのままひらひらと俺に手を振りながら去っていく。

「ま、時期に分かるさ。色々だね」

まってくれ、そう呼び掛けようとした所で俺は足音が曲がり角の向こうからこちらへ向かって来ているのと話声が僅かに聞こえるのに気付いた。俺は思わず身構え、足音の聞こえた方に視線を奪われた。再び視線を戻すと少女はもう見えなくなっていた。

走って来たのは二人の男だった。年齢はやはり俺と同じくらいで、ついさっき会ったばかりの少女と同じように何故か制服姿だった。

黒髪の少女の来ていたのと同じような黒基調の制服で、右肩に付けられた群青の校章が目を惹いた。

「そろそろ大丈夫そうっすね」

「ああ、俺らは逃げ切ったみたいだ。金星師団の連中も今日はこの

辺までは追ってこないだろ。後は集合場所に行くだけだ。時折爆発音が聞こえるのだけが心配だが」

「金星師団の連中、許せないっすね……」

「確かに金星師団も下種だが、それ以上に忘れてはならないのは桔梗の奴だ。あいつさえあんな事をしなければこんな事にもならなかった」

「もちろん分かってるっすよ……」

会話を交わしながら走ってきた男達はそこまで話して俺の存在に気付く。俺が何か口を開く前に、二人の内一人、大柄な男が俺に何かを突きつけた。銀色に光る、大柄な男の身長より少し短いくらい、といっても170センチは越えているであろう長柄の棒。その先には円形の刃が付いている。そんな物を持っていたら普通分かる筈なのに、俺にはまったく分からなかった。それどころか、それは突然現れたかの様に見えた。

「お、斧……」

俺は思わず呟いた。突きつけられたのは男の身の丈程ある斧だった。そんな物を見るのは初めてだったが、本物に間違いないという事はよく分かった。目の前のそれは、あまりにもぎらぎらとしていた。

背筋に冷たい物が走るのを抑えられなかった。此处で目覚めて、誰もいないと気付いた時とは違う、もつと死に近い恐ろしさだった。有無を言わず命を奪う様な恐ろしさが男の気迫と、その手に握られた斧から伝わってくる。

「お前、どこの歩哨だ。所属を言え」

「ほ、ほし……？」

武器を突きつけられた俺はその威圧から思わず鸚鵡返しで答えてしまう。ほし、所属。前者はそもそも言葉の意味が分からなかったし、後者は何の事を指しているのか分からなかった。

「山根さん、多分こいつ歩哨じゃないっすよ。校章がないっす。それに私服っすよ。多分新入生っすね」

横から口を出したのはもう一人の男だった。何かは分からないが、この二人が何か勘違いをしているかもしれない事に俺は気付く。そういえばさつき会った少女も新入生という言葉を使っていた。あのときは何故あんな言い方をしたのかと思ったが、もしかしたらここでは普通に通用する言葉なのかもしれない。

「そんな事は分かっている。藤田、こいつのポケットを探ってみろ」

山根と呼ばれた大柄な男が顎で俺の事を指した。

「了解す」

大柄じゃない方の男、藤田が俺の方に歩いて来る。そのまま俺の背後に回り込み、俺のズボンのポケットの中に手を入れた。

「はいはい、失礼するっすね」

俺は何か弁明を言おうとした。しかし口を開こうとした瞬間に大柄の山根に無言で睨まれ、尚且つ突きつけられた斧が僅かに動くのを見て喋るなという意図を感じ取った俺はどうしようもなくなり口籠った。

確か藤田と呼ばれていた男が俺のポケットから両手を引き抜く。

そこには俺の携帯電話と財布が握られていた。更に藤田はそれを自分のポケットに仕舞うと両手で俺の事を上から下へとぱしぱしと叩いていく。最初は何の真似かと思ったが、直ぐに何か持っていないかチェックしているのだと分かった。

「間違いなく新入生っすよ。向こうからの持ち越しだと思われる携帯電話と財布しか持っていないっす」

なんだかよく分からないが、俺の疑いは晴れた様だった。

大柄の男、山根は手に持っていた斧を下ろすとそれをそのまま地面に落とした。

「まずは非礼を詫びよう。こっちに来てばかりで混乱しているだろうに驚かせて悪かったな。こんな手段を取ったにも理由はある。後で説明しよう。俺の名前は山根孝司だ。ここについては分からない事ばかりだろうが、質問には答えられる範囲で何でも答えるつもりだ。よろしく頼む」

山根が俺に向かって右手を伸ばす。俺はまだ少し納得いかない事がありながらも握手に答えた。今さっきまで脅されていたとはいえず、直ぐにその事に対して謝罪をした。それに対して悪い気はしない。それ以前にまともに話の出来そうな人間と出会えた事が何より嬉しかった。さっきの少女は碌に質問にも応えず去ってしまったが、この男なら自分から言っているくらいだし俺の質問にもきつと答えてくれるだろう。

「秋茜鐘明だ。気が付いたら道路の真ん中で倒れていた。正直分からない事ばかりで混乱していた所だ。誰か他の人と出会えて良かった。良かったら色々教えてくれ」

にかり、と山根が白い歯を見せた。中々ワイルドな男だ、と俺は思った。それもそうだ、初対面の男に斧を突きつける程の男だ。危ない奴かもしれない、とも思うが素直に謝られた事もあるし本人が理由があると言っていた。ここは素直に質問をする他にないだろう。「早速質問してもいいか」

「実は俺達は追われていてな。ある場所にいくまで油断はならないしそうゆつくりと話をしてもいられない。だが俺から言った手前もある。まあ、一番最初に浮かぶ疑問はある程度分かる。誰しもある浮かぶものだからな。まず此処は何処なのか、どうして此処に来たのか、何故誰もいないのか、だろう？」

その通りだった。俺は相槌で返事を返す。

「驚くかもしれないがよく聞けよ。そして受け入れる。まず一つ、ここは死後の世界だ。どうしてここに来たかといえばまあそりや当然、現世で死んだからだ。そして何故誰もいないのか。死後の世界といっても誰もかしこもが死んだらここに来るわけじゃないんだ。ここに来るのは死んだ若者、それも大体高校生くらいの連中だけ。理由は分かん。だがしかし、そんな事を皮肉にしているからかこの世界はこう呼ばれる様になった。地獄学園、デスクールってな」

ここは死後の世界。俺は、死んだ。

思わず息を呑んだ。動揺を隠せなかった。

嫌な汗をかいているのが分かった。

「そりゃあ驚くっすよね。信じられないのも無理ないっす。俺もそうだったっすよ。こっちに來たばかりの頃って頭の中がなんかぼんやりして、しばらく生きてた時の頃思い出せないんすよね。まあ、一週間かそこらしたら思い出すから大丈夫っすよ」

第一話「ようこそ地獄学園」（後書き）

このサイトに投稿するのは初めてなのですが
どうもよろしくお願いします、です。

どんな小さな事でもいいので感想とか、いれてくれたりすると、
嬉しかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8470z/>

地獄学園デスクール！！

2011年12月26日21時06分発行